

## 地勢と生業からみた景観構造の把握に関する史的研究

### —福岡県宗像地方を事例として—

福岡大学大学院工学研究科建設工学専攻 学生会員○本徳雅憲  
 福岡大学工学部社会デザイン工学科 正会員 石橋知也  
 福岡大学工学部社会デザイン工学科 正会員 柴田 久

#### 1. 研究の背景と目的

かつて我々人間は圧倒的な力を持つ大自然の中で生活を営み、山や川などの土地の状態、すなわち「地勢」からの強い制約と共に暮らしが存在した。そのため、家屋や道などの生活基盤施設あるいは神社等の宗教施設の建造を考える際、自ずと地勢を中心とした空間構造の把握ならびにそれに基づく戦略的な整備が必要であったといえる。しかし、近代化による土木技術力の向上に伴い、地勢が有していた人々への影響力は徐々に低下し、重要視されていた地勢への視線も看過される傾向が指摘される。景観形成を考える際、地域のアイデンティティとなる景観構造をいかに捉えるかは根本的な課題であり、上記地勢とそこに展開された生業の歴史を再吟味することは、本来有した人間と自然との関係性を踏まえた景観論的視座として重要と考えられる。

そこで本研究では「宗像大社」という歴史的な宗教施設を有し、九州本土と共に玄界灘に浮かぶ沖ノ島、大島といった特徴的な地理条件を持つ福岡県宗像地方を対象とし、その地勢と生業に関する歴史的考察から、本地方の景観構造を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究対象地の概要

対象地として取りあげた福岡県宗像地方は、九州の玄関口にあたる北九州市と福岡市のほぼ中間地点に位置し、四塚連山などの山々に囲まれた陸地域と玄界灘の沖に浮かぶ島々で構成されている。本地方はその昔、古代律令国家の地方行政区分において「筑前国」として定められ、外交における海上交通の要衝として重要な役割を果たしていた。しかし、玄界灘の荒波や渦潮、深い霧は航海を妨げることも多く、船人達が航海や漁業の際に海上の安全を祈願し、常時祭っていたのが、田島・大島・沖ノ島に鎮座する宗像大社である。

#### 3. 宗像地方全体の地勢と生業にみる景観資源の把握

##### (1) 宗像三宮の立地

宗像大社は朝鮮への航海を守護する尊貴の神として讃えられ、前述したように航海の際には宗像三社に参拝して航路の安全が祈願された。特に古来より大島・沖ノ島間の海域は渡航の困難な自然条件を有していたとされる。さらに大島・沖ノ島は朝鮮に最も近い対馬とともに航海の目印とされていた。特に、沖ノ島に鎮座

する沖津宮への信仰は厚く、多くの祭祀遺品が出土している。

一方、三宮のうち、辺津宮の鎮座する宗像本土と中津宮の鎮座する大島との距離は玄界灘を隔て約11kmであるのに対し、大島と沖津宮の鎮座する沖ノ島との距離は約49kmと4倍以上の差があり、視覚的にも見えにくい。しかし、明治43年に描かれた官幣大社宗像神社全景図(図-1)を見ると<sup>1)</sup>、手前本土側、辺津宮とともに中津宮のある大島、沖津宮のある沖ノ島が同時に描かれている様子が見て取れる。

##### (2) 遙拝所による三宮のつながり

大島の北部に位置する岩瀬には沖津宮遙拝所がある。これは沖ノ島にある沖津宮を大島内から礼拝するための施設である。古来より地元では沖ノ島は距離的な隔絶感に加えて、近寄り難い神聖な島として位置づけられている。よって沖津宮遙拝所は大島ならびに内陸部と沖ノ島とをつなぐ宗教上重要な施設となっており、現在まで何度も修復・改造が繰り返されている。

一方、「筑前国統風土記」と同書の拾遺によれば、大島の宮崎にも辺津宮の遙拝所が存在していた<sup>2)</sup>。しかし、現在では中津宮末社巖島神社となっており、遙拝所としての機能は残っていない。これは沖ノ島に比べ、大島と本土との身近さが遙拝所の消滅につながったものと解釈される。

##### (3) 漁場としての玄界灘

玄界灘は海底の変化が大きく、魚の宝庫として知られる好漁場である。海岸線には岬や入江、岩礁地帯な



図-1 官幣大社宗像神社全景図

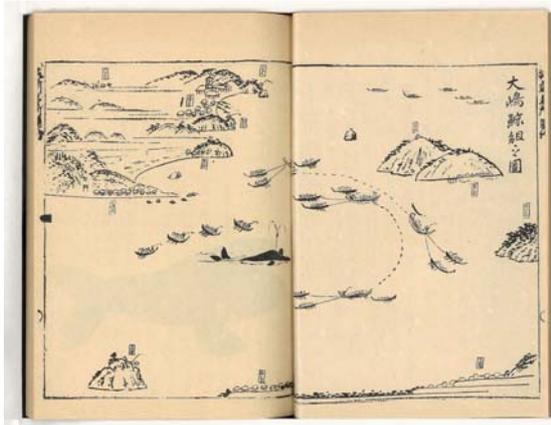


図-2 大嶋鯨組の捕鯨の様子

ども多く、変化に富んだ地形を有していたことも多くの魚が住処としていた要因の一つである。よって古来より、宗像地方に住む多くの人々は漁業を生業としてきた。しかし、沖ノ島-大島間の海域は荒波等によって遭難事故が多く、そのため大島内では漁業に出る人々の家族が沖津宮遙拝所から安全を祈願していた。

一方、18世紀中頃の大島には鯨組が存在し、捕鯨漁が行われていた。大島と地島の間は北上する鯨の通り道になっており、大島をはじめとする宗像浦々の漁師達が協力し合いながら鯨を獲っていた。筑前名所図会に描かれた捕鯨の様子を図-2に示す<sup>3)</sup>。これより鯨を発見した際に合図するための旗が大島の加代や勝島に描かれているのが分かる。さらに大島・地島・勝島などの島々と陸地の鐘崎・神湊が捕鯨漁を行っている海域を囲むように描かれている。つまり、大島周辺の島々と本土で囲まれた海域が、漁場の中心として位置づけられていたことが推察できる<sup>4)</sup>。

#### 4. 大島内の地勢と生業にみる景観資源の把握

##### (1) 施設整備による島内の変容

大島漁港は島の南東部に存在し、主要集落近くに宗像本土に向けて開かれている。本漁港は1963(昭和38)年以降、継続的かつ積極的に整備事業が行われ、現在に至っている。大島港の起源は1261~64年にかけて安部妙任によって築かれた比丘尼瀬と呼ばれる波止場であり、現在の避難港としての基礎が築かれた。

さらに大島には歴史上、多くの国防施設あるいは軍事施設が建設され、1336(建武3)年には宗像大宮司氏道によって大島城が築かれている。この城は敵との攻防において地の利を得ており、宗像氏の詰城として最適な条件を備えていたとされる<sup>5)</sup>。

第二次世界大戦中では、宗像地方の島々は北部九州の重要な拠点として軍事施設化され、大島、沖ノ島の両島には軍要塞が布設された。島の北端部丘陵地には大島砲台が存在し、大陸からの攻撃に備えて北側に広がる日本海を睨み設置されている。当時、大島の軍隊

は重要任務を受けていたものの実戦には至らず、砲台跡が現在でもほぼ完全な状態で残っている。

##### (2) 集落の形成と地形的立地特性

大島における集落は、島の南東の湾曲した海岸線に沿って、玄界灘と山地との間に張りつくように並んでいる。それらの集落は島の南岸に位置し、宗像本土の神湊や鐘崎に向いている。大島は玄界灘に浮かぶ孤島であるため、冬期には北西から強く冷たい季節風が吹き込む。それを凌ぐため、集落は背の高い山々を盾に、御嶽山のある丘陵台地を後背地として集落が張りついたと考えられる。また大島南西側の宗像本土との連絡船往來の多さや利便性という点から、集落を築くには好条件であったと推察される。大島の湾曲した海岸線は前述した港を築く上でも好条件であったと考えられ、集落の形成に影響を与えたものと考えられる。

#### 5. 大島の景観構造とその可能性

ここでは宗像地方の地勢分析と生業を中心とした歴史の変遷の整理から把握された景観構造について考察を行う。前述の通り、宗像大社三宮および各遙拝所の位置関係、捕鯨漁といった玄界灘の生業の歴史が把握され、宗像本土、大島、沖ノ島それぞれの繋がり方にある種の濃淡が見出されることが示された。つまり、宗像大社を三宮並列で捉える一般的解釈に対し、中津宮の立地する大島を境に本土側との結びつきは強まり、反対に沖ノ島との結びつきは弱まることを示唆された。よって、つながり方の変化点に位置する大島は、宗像地方において重要な場所性を担うものと捉えられる。

さらに把握された大島における生業の展開領域、地域を防衛するための施設立地およびその指向性の存在によって、北東から南西に連なる山地の尾根線が島内での境界となり、人々が生活を営む「内的空間」と防衛機能を有する「対外的空間」に大きく二分されるという景観構造が明らかとなった。

このように宗像地方全体および要所と捉えられる大島の景観構造が地勢によって把握されることで、人々の生活に与えてきた影響を再認識し、さらに地域のもつ景観特性を解釈する方途となる可能性が示された。

1) 宗像神社復興期成会：宗像神社史 上巻，宗像神社史復興期成会，p.149，1961

2) 中村大学図書館 HP, <http://www.lib.nakamura-u.ac.jp/index.htm> 筑前国続風土記，巻之16，17(宗像郡上，下)，貝原益軒アーカイブより

3) 九州大学デジタル・アーカイブ：筑前名所図会巻八，<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/meishozue/>

4) 大島村教育委員会：大島村史，大島村，p.297，1985

5) 廣崎篤夫：福岡県の城，有限会社海鳥社，pp.179-180，1995